

WHAT

イギリス・ロンドン大学

文教育学部 言語文化学科
グローバル文化学環 4年
ストルスマン リリアン シュウ



私のロンドン・SOASへの留学の動機は、ざっくりわけて二つありました。一つめに、もともと専攻していた開発学の分野において先進的な教育機関で、英語を使って多角的にその学問に関する視座を学び、自分の持つ関心・疑問を解き明かしていくこと。二つめに、日本という特殊な社会の中で翻弄されていた自分のアイデンティティを再構築することでした。ロンドン・SOASは結果的に、両方の目的を達成するのにとても理想的だったと思います。

まず、学問に関してですが、交換留学生は、どのディシプリンの授業を取っても問題ありません。私は開発学と、地域研究に関する授業を取りました。開発学の分野では、噂どおりにSOASのラディカルな姿勢を受け継いだ学生たちとの熱いディスカッションもあり、広く深く開発の政治的・経済的側面における基礎的な枠組みについて学ぶことができました。しかしマクロの視点から、文化・社会的側面にフォーカスすることが少なく、また私が追及していきたいと思っていた開発そのものの意義に対する懐疑的な問いは授業を通してなされることがなか

ったので、その点は少し残念でした。

また、地域研究分野では、"Ethnography of Japan"を取っていました。「日本人であるとはどういうことか」という常に抱いていた疑問について自分なりに解釈するにあたり、日本の外からの視点を取り入れるため受講していました。自分の属する社会が、人類学的な用語や概念で切り取られ、説明されていくさまは中々刺激的でしたが、同時に人間を視る学問の可能性と限界を両方目にしたように思います。

講義は、基本的に授業時間2時間+討論1時間から成っており、その準備として主に課される膨大なリーディングをこなしていました。そのお蔭か、本や論文を手抜きしつつ、重要な部分を取り出して読む方法が身に付いたと思います。また、授業に参加する際も、期末エッセイ等で評価される際も、授業で学んだ知識を道具として、自分の考えをクリアに論理的に提示することが常に求められました。この体験は、今後学びを続けていく上でとても大切な糧になると確信しています。

留学でのもうひとつの目的として、自分のアイデンティティの発見がありました。日本においては、色眼鏡を通さずに人と関わるのが難しく感じており、多人種・多文化が混じり合うロンドンはその束縛から私を解放してくれました。結果的に、この一年間を通して、曖昧であったアイデンティティだけでなく、価値基準が確固としたものになり、今後の人生においてどのように社会と関わっていくか、その方向性が定まったように思います。

ロンドンで過ごした1年間で得た刺激、友人、経験、想いは全てかけがえのないもので、また今の、これからの私の生き方を色濃く縁取っていくであろうと強く思います。